トラ、ポットの群像を前にすると画像はずたずたに断ち切られてしまうのである。砂丘の歴史は非連続としてしか私の前に現われて来ない。

「逆さ富士」の田子の浦にブルトーザが爪を入れたのは昭和三十三年である。老松が倒されミキサー車が隊列を組んで侵入してきた。静岡県の開発担当者は「田子の浦港は太平洋ベルト地帯の中枢拠点となり、鉄とコンクリートで築き上げた人工の港、海の彼方へ限りない夢を開き日本経済の明日を開く港」（昭和四十四年、静岡県富士臨海総合開発事務所発行『田子の浦港』）と手放しで謳歌した。しかし、港はヘドロの沈澱池と化し紺青の海は異臭を放つ赤い海と変りはてた。海岸侵蝕は築港工事とともに確実に始まっていた。昭和五十一年度の富士市の公報は「この三十年間に百メートルが削り取られた」と記している。なごなごとした砂浜が扼殺されたその日から、けんか好きで仁義に厚い田子の浦の悟空たちも消されたのだ。いまこの荒廃した海のほとりに子供の姿を見ることがあるとするなら、ものわかりのいいパパとママに手を曳かれ、パンダの縫いぐるみを抱えて見物に来る町方のお坊さまぐらいである。

こうだ　としひこ・静岡県内の小・中学校勤務のち、県立児童会館運営課長、富士市公害市民協議会長などを歴任、現在、著述業。著書に「わが存在の底点から」（大和書房）など。

海の環境は改善されるか？

宇田道隆

昭和五十二年八月二十二日瀬戸内海環境保全知事市長会議が同海上で開かれて石原環境庁長官も出席し、「四年間にＣＯＤ（化学的酸素要求量）の示す汚濁負荷量が半減」で大ぶん海がきれいになったような発言のあった直ぐ後で八月二十八日鞭毛藻類のホルネリア・マリナを主体とする赤潮が播磨灘の香川、徳島、兵庫（家島）各県沿岸に大発生、養殖ハマチ二百二十万尾斃死、約二十億円の被害という皮肉な事件が起った。昭和四十七年同期に同じ播磨灘で同種の赤潮でハマチ四百万尾斃死・七十一億の被害という教訓が一向生かされておらず海はやはり本当にきれいになっていないことを立証した。この赤潮発生件数自体が昭和四十七年に一六四、同四十八年二一〇、同五十一年三二六と増し、根本原因はリン・チッ素の負荷量による過栄養にあり、産業廃水と都市生活廃水の流入が供給源とされている。この栄養塩は洗剤使用などがもとである。下水場でスケレトネーマや海藻や魚貝などの増殖と併用してリン、チッ素を除去する方策研究の一方、粘土微細粒子（主に粘土鉱物）を使って河海負荷栄養源を凝集吸着して除去する方策が新たに持ち出された。ハマチ養殖自体が十倍近い大量のエサ魚を投餌した残滓と魚の糞排泄が大きな汚染（自己汚染）の感をなしていることは周知のことである。海底に堆積した浮泥は高い栄養価をもつ以上底棲生物（エビ、カニ、貝、ゴカイなど多毛類、貧毛類）の餌になりこれらの繁殖を利用して除去して行く方策も開発されよう。家庭や工場での洗剤規制も当然問題とされ、無害の代用品に置換されるべきであろう。海を殺してはならない。藻場が滅びることは海の生産の消滅する段階にある。

重金属やＰＣＢ、農薬などに食品添加剤などに含まれる発ガン物質など危険な汚染物質が懸濁微粒子、ヘドロに吸着された廃水も分析されるまでは一見きれいに見えても油断ならない。廃水の汚染濃度も降水や外洋水の流入量によって稀釈される以上「総量規制」が必要であり、環境アセスメントが継続的に求められる。

本質的には海の環境はまだ一向に改善されていない。このごろ東京湾その他でハゼが増えたとか魚貝の生産がもどったとかいうのも黒潮が沖合冷水塊で大蛇行して盛んに湾奥まで流入して浄化してくれていることを考えねばならない。汚染源除去への努力の手を決して緩めては

いけないのだ。

ではどうすれば海が本当に体質を改善し、元の健康にもどれるか？　それには海の食養生が要る。河川から多量の毒物や栄養過多の肥え過ぎになるリンなど含む洗剤の注入や、プランクトンを殺し、藻場を枯らす原因となる農薬など流しこまないようにすることである。まず使わさないこと、下水処理場で始末することである。

環境庁がもっと強力になり、環境を第一に大切にすることが人間精神面にどんなに大切かをまずはっきり為政者が理解させなければならない。伊勢の大神宮で「何事のおはすかは知らねども」と森厳の気に打たれるのは数百年の杉、その下を流れる五十鈴川の清流、静かなたたずまいが人の心の奥に呼びかけて来るものがあるからである。「深山大沢龍蛇を生ず」というが、日本の国の日本人がこの風土によってはぐくまれ、地震、台風、火山、黒潮、親潮とその海面からの豊かな水蒸気のもたらす湿気と雨、雪、水などが多彩で変化に富んだ風土、花鳥虫魚を生んで、それに馴染んだ人々が万葉集などに見るように詩情感懐を風月に託することができるようになった。それが封建時代から明治、大正、昭和の前半はまだ保たれて来た。急速に変り出したのは戦後十年ぐらい経ってから後で、経済成長と逆比例して自然が傷みつけられ、切り崩され、コンクリートのビル、道路が緑地と入れ代り、石油文明、自動車文明の全盛と共に鎮守の森は色褪せて行った。花見や潮干狩を楽しむ場が無くなり、海水浴場は湾奥から消え、その場所を外へ外へ求める人は増えて雑沓は激しくなった。金は入っても生活の心の豊かさは得難くなった。釣人口は千五百万というが遊魚局も何もなく、トラブルが漁村に多い。約二十年間に列島をこのように改造した為政者はこの自然の変貌と共に起った人心の変り様――殊に青少年の精神的変化への影響をどう考えるのだろう。地人相関の理がいみじくも現前して会得されたと思う。入浜権の騒ぎも無理からぬ尾ノ上、相生の松で有名な高砂海岸で起っている。経済的に得て精神的に失ったものを回復するには自然景観の修復、自然風物の復帰、美しい自然の保全と正しくこれを楽しむ道を講ずる以外にない。

毎年百万人も海外旅行してその渇を医するより吾が日本の自然の美しい景観を護り抜き修復し、親も子も自然を愛する心から人を愛し親しむ道を学びとるようにすべきである。思い切った今の十倍ぐらいの予算を国立公園、海中公園を見直し整備しレインジャーシステム、自然展示博物館、水族館等の教養に役立てるようにしてほしいものである。

うだ　みちたか・東海大学海洋学部教授、理学博士。第一回日本海洋学会賞受賞。著書に「海」（岩波新書）他。

セイタカアワダチソウのこと

木村治美

それを、セイタカアワダチソウと呼んで、間違いないと思います。

ごく近年に、アメリカから入ってきて、あっというまに、日本全土を占領してしまったように、おそるべき繁殖力を持ち、黄色い花を咲かせる草のことです。

総武線を利用して、もう十年以上、津田沼まで通勤しておりますが、あの草が、沿線に姿を見せはじめたのは、六、七年前ではなかったでしょうか。

それ以来、年ごとに、この草は勢力をのばしていきました。線路沿いの空地。家と家の間の露路。川の土手。もと畠だったところが、いったん作物を作らなくなると、そのとたんに、セイタカアワダチソウがとってかわりました。

冬は枯れていて目に入りません。それでも地下茎は確実に勢力の拡張をはかっているのです。梅雨から夏にかけては、ただ緑だけなので、よく見定められませんが、九月に入ると、背丈がぐんぐん伸び、先のとがった三角形の房の穂が、しだいに黄色味をましてきます。